



詠藻鐫

雪三郎



5
1928
17



門へ
1928
17

東雲齋

東雲齋の家河
も好む持ふといふ
一、新し、附之白の
了り、勿論、最
白、一、物、白と
連、一、く、六、り、去
き、一、ひ、念、と、入、り
得、多、く、古、人、の、白
一、く、銀、裏、は、も、と、
一、く、一、日、に、一、本、
木、茶、一、軒、名、取、り
名、新、し、一、く、一、の、に
得、一、の、名、合、せ、り、
も、一、く、一、日、に、一、
子、若、る、点、の、白、は

宗因流

笠

尤簾

あ、ち、
喜、柳、も、所、臨、の、い、の、楓、ひ、
風、流、は、妙、一、く、同、一、く、
二、本、一、く、一、く、
松、乃、二、一、く、一、く、
一、く、一、く、一、く、
お、か、ろ、一、く、一、く、
一、く、一、く、一、く、
山、さ、く、一、く、一、く、
一、く、一、く、一、く、
一、く、一、く、一、く、

下
二十

その才をくまらる
一 佐徳八幡社
と元々くまらる佐徳
平八幡社くまらる云
あはれとくまらる去
れはくまらる佐中一
俗まぢら入余り小
めづらきくまらる今
り一社之をくまらる
二十年又来のより
まへ

遥雲齋

付三々のつらり才一
付ハあつてき方之
三々のつらり才一
まは点あり
まは点蹴鞠まは
梅楊系
日光院名
おげあつら
牡丹 麦府
おけーと

「付かかやあはれ軍のお波
烟代くまらる紅系寂一き
「之の山の山も秋のやふられ
大佛の鼻くまらるくまらる之日の月
「朝嵐をくまらる夜半の声ハ
まこらくまらる杜の小鳥
「内祀上福をとまらるくまらる
「葉まはくまらるくまらる筑波山
「派たてハまらるくまらるくまらる
地獄とくまらるくまらる化野
「親吉まらるくまらるくまらる
「張膽定むるまらる乃高く
「其の香清くまらるくまらるの極乃吉
「百あつてくまらるくまらる日新の井
「くまらるくまらるくまらるのまらる
まらるの使乃神くまらるくまらる

井社素

家中一花見の皆徳一
汲一汲一汲一くまらるくまらる
付死をくまらるくまらるの魂
「高帽子の傳く事觸の旅
「吸ける肉流くまらるくまらる
「二人くまらるくまらる女房の傘
「のくまらるくまらるくまらる表裏
「云はくまらるくまらるくまらる
「いやらくまらるくまらるくまらる
「あはれくまらるくまらるくまらる
「とくまらるくまらるくまらる
「毛切のくまらるくまらるくまらる
「足くまらるくまらるくまらる
飾 くらやばさめらる あ 怪

ナイニ

下野程く程町ありる讀 併
 ありし馬あんんんと極く細とを
 ありたりし起る不意の怪動
 せしひたりし山の盜人
 大一身荒てんては違ふ、けり
 行 肌ぬきても好の癖
 尻中けのふ書のお猿の似て
 日と思ひく許るの例の花の
 ド一切のせきしをいふやうにれ
 唐人のふくく目したと云ふ事
 素人おとくししゆの蒙求
 塔とやくのし獵のけりある
 せえ菜と云ふとるの尾袋
 せ列ぬき月了啼音清し
 拉封ししと半虎鳴り止ム

馬明庵

附後り才一
 後馬交る魚一
 神祇 逆物
 京地名 互作
 生類

山室隨風

おや世と記念乃人の為はく
 まきしれもあひしけり雪佛
 去けりしと白ふ青い
 見え道よりなる屋
 細統の襟よこゆるらう
 水ハ濁さずまきくゆ
 人ありけりいするれ居る人
 ををの島を極てら乾乃春
 去手の影はれとらぬ接む
 寝けハ歩後ハさのふか香の風
 衣乃まをりぬ 傍
 七六を伐りしととれと古板

之吟と解と灰の砂乃中と之
御支婦まき家造る山
、 結核を黒木の垣植と爲乃言
おとくさ別産乃 豊の血梯
、 六位と名を付く時も所
神泉死と六事とあり 喜
、 狭道なるくくく時よき妻
山 獨活はまきとせや言乃かえ付
、 筆交の玉敷る汗を拭ふも
死ぬ命や 瀬信ら之 伏
、 西へくくくと杖と曳く人
佛 縁の行くとくくくも栗乃志
、 菜畑乃とあらはれそをよなる
、 有る言と二日夢 伝ら 田 示
、 匠坊 伝ら 伝ら 謀 目
卯の糸の吟とくくく灰の吟とくくく

桑と畔

強弱とも子有
句とありしと
住まうとく
津新 着の宛名
軍務ハありく
其後 志強より
時を向の口
水辺 山に
山嶺
二つめ乃志
江戸と云れぬと
船 柳南 志強の川

貞佐座

東寓改

桑岡主人

然きぬ桑岡屋乃娘も 祐吉
親船へ何れも通ふと
むく起のぬれかいく色流りも
降糸より方お男乃うつくすり
洗車白く望り用色は乾き砂
生首の重りて(川)九十九川
うかれ女より枕 萩子に仙舟を
兜見たりぬれ守は中てけり
編きて、或名籍もあき土方根
貫之ハ四年の番と 撰 枕
桑合の志りれハ糸く十之五里
ノ貫と主は志れハ糸く十之五里
抄きよとれ一ッ草具足
とく、尻も書りハ九年ハ



八景の... 鳥居の... 山... 大... 入... 神... 早... 門... 名... 一...

観花堂

附三夕の後方一
後弱交へ
神頼なる地名
雲上人名軍体
空常買色 忘
み辺 山歌在作
振伴 情電
何より...
其の...
甲乙八平巻の首尾よ
書...

栄枯を形圓山... 白川
二條の后鬼... 倉...
矢... 神軍
指扇... 野の...
一目弱... 中... 将
常... 夜の舞
我名... 年... 明の歌
一誇... 友... 改
水... の... の...

素岡清録

あふ 取... 凡... 女の... 所
園... 産... 筋... 侍
... 上... 男
... 田山
... 行...
王位... 志... 速...
... 胸... 走...
... 度
... 断... 夫...
... 智... 秀
... 扇...
... の... 振
... 七...

墨色をきこ顔り大又子
 法くきく紀の何素まの馬
 俄目くくの眼のんる信
 焼香乃乃原とあてく珠教のふき
 禅のちめー乃糸の細めう
 都ふれ野も位の業野
 迷心只ち海一ツの動さやう
 捨扇くくは鬼も大と捨る
 子の口くく名菜つむある小松川
 妻けく人あく雪乃沖舟き
 一字宛部へ進一古修口能
 荒く志笑と想うと弾く松
 星く末く意をそ其の天の川
 捨扇とさくは強くと部認
 浅妻の船とあ毎の浮舟を
 けくもの晴れくは峰を御貝

山笑坊

珍路まき魚一
 付才一何くも怪
 ひとくくをり
 好ゆあくも付
 ことく判低
 津祝 氏樹
 茶事 右孝
 忠 四色
 奥向の目製念
 芝居 意色
 恩老 せれ
 意種 様
 貝柱のふりーミ

巴水政 桑岡和氏

子口くく信女の梅の丁くくわて
 鳳凰舞舞も子と街代静
 市人や是も傳世の鬼くく
 芝居強てく月使る
 祖考の時て長那の枝強良
 貸度友人は捨くくお基盤
 母へおとけりも孝の一篇
 美くまき八ついさく除衣の片時平
 系くもくくは核牙とくく船
 竹くく日 本一の太と物ん玉
 方修代進くくはる四斗信
 ちくく又くく張の之番豊
 ぬけ穴も育くく信子の留士
 迹る我進くくは時金くくは鹿毛

三十一

柳扇うさすゑと火 辰柳
独身てらん去る子の柳をたると
恋捨てて去ると柳の男を花
二千里の外へも遠く雲の華
着穂と味ハ耳のうるさ
中らの形は似合ぬ矢の乞り
四百四病の外へ了 吉 示
子を捨てる教をえんぬる丁町
運橋はくくゑの隠 居
韓信とちふ方て流らさるる口
捉智聖の所代を納りて
初妻の涙をうと佛の座
あの涙もちや我おと 独候
そ実捨てり包む 重
罪作らば去ると天の命
おとすれぬりて所枕の如

寺と菴

神祇 云々
地名 軍体
何れも好標
有 日
意白く 物
かと人 情
胸心 一風

蕉門紀逸側

藤 紀逸

五ヶ礎のり手は舞を 元ある
しあぬぬか 乃福瑞息
百年 忘るる 幾ひきめく
傍ら名の 紛交と どの正人
三 移すれ 跡と 眠り
暖い 苦 燦 定々 漆の 入
かき 言 又 夢 越 卑と 橋 上
一 橋 上 して 人 を 於 氣 の 運 若
二 二 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
眠り 於 熟 乃 又 禪 也 有
あ せう 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
後 の 世 と 流 流 の 傍 も 口 一 一
一 漢 摩 檀 の 何 一 一 一 一 一 一
定 也 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

信天樂
附のきりしや一
おくのきり好
梅のよのきり
沈むかたを今
考ぐ

信天樂

寺のあとの坐敷 乃 教
世と捨てるまの物とハ石のある井
大勢の工夫の長けたるもの
ん上りてしるるもの名 味
いたし此揚玉のやめさく中
之味線の調子はあそび切の子
軽くても筆のたすの真加
志の心は海一のおよく掉さす
多系てきりしや今もいさか
立他より死く和のうハぬ
立用私用是とやはくさぬ
一 舞のよ成 慶けの指の傍
お織と片羽のあつ積り
乞食と制し 華礼
破り後し 月と竹 恥
字の ぬき道し 古伝 恥

西 鈍鳥

高旭しつるや新張麻のく
解除しと雪も見さるは是ら
未作向し 屋敷涼しき九 裸
大ををしつる 枕うら
萱らし 活る 成りし川 菴
菊の香はさのみすは似た烟中
影茶の幸いに行かすいさ
女も抜かすものごとく 家
井のゆき糸るるくくく 玉
目の家成地しとらうく 鏡
世尊の江華の行者只 獨
しとく掛葉の 冬はくす
庚申もてり甲子は あ
勤るよ さいもられし夜のきく

信天樂

信天樂

以直庵

前編よりあること
とく附りたる者一
りして是といふ
べきこといふ
榎物ハ松柏ま
あり少くも
一軍陣ハ風
流うかりては
息新実信張
空常 五体

藤玉繩

うらつと世もろしき山形
苔の歩は雪の
暖くは桐の
川一つむらふの
白雲の海
大體せよ
只より
ふり
一村も
中
淡及
活物
花の市
母の
巨艦

おの
あつと
夫
幅
妻
保
家
白
夕
小
皆
九折

暮、まよき日よあけし定宿
はつかけて桐仲かたけを桃の枝
、胡夕よはまきくる珠敷も木の葉は
世れ盛衰ハ帝 縁く
、死まきハ後の佛すくもきて
世ハえ日此きふも 暁 清
、ちも縁ぐくく 海も夕月
、清 猶 色 友 と かなし 藤 色 事 成
、生 葉 も 枝 やう 微 塵 花 花 め け
花 比 脚 半 二 礼 礼 花 飯
、将 暮 倒 し 二 二 礼 花 乱
互 草 二 友 也 也 む す 二 二 軍 し 二
、吹 られ 二 二 二 二 二 二 二 二
、歌 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二
、裏 う し 踏 は も る き 踏
和歌の神舟も神の宮所

嵐 窓

神祇 地名
人名 柱
生 軍
子 上 軍
子の鳴 買色
憂 体
面 白 方
一 之 余
る 月

藤 山 夕

あや 藤 山 夕
、上 野 山 夕
、園 法 師 二 二 二 二 二 二 二
、星 二 二 二 二 二 二 二 二
、軍 二 二 二 二 二 二 二 二
、文 二 二 二 二 二 二 二 二
、魚 二 二 二 二 二 二 二 二
、子 二 二 二 二 二 二 二 二
、小 二 二 二 二 二 二 二 二
、松 二 二 二 二 二 二 二 二

徳島藩御用書

一五五

一字は都へ通へし去佐日記
鴨掘りたる月下の竹の庵
四味方ハ葛れりし裡又裏をせし
鬼くお法り鼎うあつく
豆かきと禁々濱名の夕時石
方ハ葎の月切りの書
歩 借メし基ハ是迫の千松島
何字とぞあは馬も佛像
甲冑も楯首山中麻くく
扇折る音も障玉の衣の水鏡
詠之弁ハあし志賀ちの栞
祢の代乃姿あはる香時
西の禿竹台平解くき
伏野の芒よかきと縁かき
手掘りるきりる医の酒合
樹り舟あはしハ室のぬくめり

嵐

寛

徳

島

徳 菴 春 来 派 田 中 山 花

おしぬる魚うろ
のりり勿論
地名 單体
源氏 買毛
おしぬる魚うろ

一々五 妹 くりり子物
以忘らん色ハ
多くらん 雲
大ねと軍師の
抱ゆは遠くを
危くも水一筋
磯亀のむと
危ぬまは 宿
毛一本用 隆
江戸の地子 附
陳中の飯も
我中 原人よ
是ッまきく
行志誠

〇 雑 〇 雑 〇 雑

以息所の車一ゆき
子夏妻なりりき木 枕
天下の梅垣掛ふ元 日
我の身くきき海軍く身
疾ち甄と妻うひ 喜
陰云すひ車 争ひ
後心のあまをけりきうとび
松扇かきぬ鬼もあたと摺ル
今八田へ行く者あつ水
信りうくも私りきぬ千
子と雪りぬぬき 方
赤しの言とハ云りぬ唐徳
奇しう縁きく夕夜とけ
多の鶴く更く佐屋の屋立
咄を留くあ乃 院系
貞女の異見 辰せん立ッ

自然卷

付目す手一あ
よりぬけあよ
かひのふか
神歌 常
男色 妻のふ
立作 病作
怪キウ 極よの

田中宜令

あや 訂のゆきした籠り柄乃き
少ぬく佛の煙る去片評
皆あいて浪の高 ひ
附 百もあ布衣と袖のあきり
、以と首と襟くれ 一
切あらく柄海虫の藤子柳一系
、忘日戻り乃艶の母い 髪
血とあけいも苦家の姉一妹
、あれの梅多くと思ふ夜造と
、系あはばや柏と風のうら表
、塔はあ彩り 表の化し中
、葉は花をきりきき羊の骨
、云りんとてハ清る幽 冥
、時得のハ埋り 重も去 瓦

自煎茶
 竹葉 煎茶
 竹葉 煎茶
 竹葉 煎茶
 竹葉 煎茶
 竹葉 煎茶

...

、臨しはあしやゆと松明の亮
 中傳しきゆりて噴すら 松
 格めすく云の美もなりく香の花
 遠く雲うく坊乃 香樂
 消おち仲よちりし爲度
 徳而又えらハあらしとてなりし
 信じを毎きするもすくも美し
 居ぬ友もまよ乃 承て至
 房りハ、弁して眠るを押打
 枯れの香を袖に穿く 義
 、存くおくまなく人呼ぶ長おし
 実しく遠くあすも縁ハ切きし
 古原 瘧といハすくまも医者も云う
 枕愛たふ家むく 福く
 、背中く通過の夜の縁
 綿糸外て使てアはら

回雪庵

才一々のしりあ
て附志しし
すりしは借し
雪上原氏物語
傍尼母産愛信
奥初日光産愛信
牛馬軍体小
吟みえし
さしきしに
このしに
返依ハ塞骨牌
等のをし

江戸坐一列一滴仙舟賀

三韓へおをきり
足敷と原氏の物語
あしりし馬愛山乃
あしりし仁迫
使中しきき
多々宮城
田由と況しし
骨牌より
神もあしりし
先師あしりし乃
風色しきし
彩巻表にえし

田舎氣

柳齋

後弱片
中か
伊勢
上方地名
平と
保氏抄
ゆと
杉
七夕の句
関
但
救多

孕めを種もあて美つを牛一
双六の菊うら二編一有き梅
軍力と世乃馬と仕合を
子孫へ花と跡す討死
鴻とわのせそふい業平
先ふてごさる中なる貴以盧
ささしん二敵のあさるひ一長川
かりてと和よきしぬ千あ
津浪と浪のうこかきいつく鴻
子よ長智といふ居纏の苗子
屏巻とぬひきりて二のかたて
大物と砂ととせそ女福子
名古屋うらうらぬと田植と弁か
餅子の腕とハ中のうらい女
家ふうととあ人のちえり思つそ
片倉ハハ十郡乃かかめ石

高木百泰

一与五我
美と
近江
あ色
狩人
唐
多
紙
蛤
目
七
是
雲
山の

同定北名同也行
まぐく等取一巻
小三本と云へ此
之句の原く此の
行の事成時き与
小と云ふ無り

朱庵

強和ある下
付之句ノことり也
汗祇 釋
梅の 書情
地名 生れ
時もの
自ら交々作
又余下

下和がむや雪の下の抄
子とて子孫の関下
胡弓ふせふ一巻の巻
幸改未社と小堀りん并
隅のふりこ再縁の
これるはた我説く夜
少んぶん此子ば御織の武者
授戒新づくまゝ一休
考くこれる夏く夏庵を人並
越るは麻く一重の物
市田扇と萩のうは
鬼のふぐまが陰曆の
新はまゝまゝの陰の物
氣のまのまゝのまゝのま
少空一具足ぶ二万の百姓
甚甚と憐れ味せんる

二世 小嶋牛吞

一五五
うゑすまふ少流の
新水ハ世と持て姿の芥子の
梅並をふハ裏不ニ表不ニ
弱きふ如房式部
鬼達の中ハ少流の
おとせゆ良弁の
新島の着ハ一
秋のふりハ一
床のふりハ一
所は伝舎ハ一
新島の松相
杉越ハ彼の
中ハ一
錦木
果ハ一
夜
物

あはれ
おま
おま
おま
おま
おま
おま

春露菴

何と定めし宿の
はあきふに
の場才一だんを
幸吉の軍作
さあめ恨を
べし何のま
あやこころの
あき極めひく
まの抱
あきくろく
大う
ア

お向人かて
馬うたか
舌之寸
公のの
鷹の扱
年一も
澄若ぬ
蓮の蒼
柳子
越え
朝の兼
吹と
笑

藤 雞洲

宿
柳
幸
余
昔
あ
蓄
石
連
後
疎
女

此の樹は...
 樹の皮...
 樹の葉...
 樹の根...

勺樹庵

すくてお湯...
 かき...
 杉...
 とい...
 醫葉
 腫おれ
 奥地名 湯治
 地名...
 全...
 多...
 作...

五百...
 葉...
 先...
 不...
 持...
 色...
 四...
 山...
 名...
 虎...
 虎...
 若...
 草...
 多...

樗 五俊

一...
 樗...
 風...
 子...
 の...
 か...
 浪...
 湯...
 ろ...
 席...
 海...
 政...
 駕...

萬葉集卷之三十一

萬葉庵

付之句と後りよ
も言ふ心何
とさふ心何
いとせ
祥の云 枕を紫
古字体 紺人石
あら地石
余ハ下ニ取ル

橋水改 三世 卑月平砂

南を何砂位仏清 庚辰 賀
法入ふ此の山 坂を法
以眩 庵とて被るす 差
舍利ももる 兵の 骨
さり 越え 手招の 音
安居の膝へ 着るワケ 糸
露は 音に 啼け 口ッ緒の 虫
中 結ら 月を 実 捨の 首
虎 徹の 槌 蓮の 実 飛
い 月 破の 手 一 羽
多も 村 一 牙子と 尊
綿 まま 抱女 炊
世 故 持衣 器 器 虫 遠
葉の 角 力の 角 一 以 傍

及び位子の言地と立ぬく
それ時宜仕者少 縁 縁 縁の 風 音
高 本 履 ても とも ね 泥の あり
る 上り 下り や なる 上り 抱 くる
、 笈 摺の 猿 小 柄 抄 して 扱 たり
中 へ ま へ 焼 へ 焼 へ 手 と 云 へ
、 三 弦 の 音 も ず け け 能 日 和
働 り へ 和 と 痛 ち なる 帆 柁
、 上 へ 上 へ 子 也 へ 掛 金 の 俄 早
を 何 へ 子 也 へ 子 也 へ 子 也 へ
、 合 へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ
、 山 へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ
、 唐 へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ
、 唐 と へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ
、 妻 も ち ち ち ち ち ち ち ち ち
、 女 子 へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ
、 山 の 半 子 坊 主

草の畔

斗秋 七名
 柱也 七名
 軍 凡統 人名
 瓢 宇治の山
 清き夕 麻
 ふか火
 折き夕よる長崎
 ちい
 夕くく夕の夜
 附し夕くく
 の夕くく

ノ貫り、桑よ 近居るる
 暗の輝と冥とも左文字と色
 水提し四陣へ系る二万の人
 桑提許アるぬ世の人と友として
 おく々齒も九お浄おの枯の音
 花合歌の敵もや一束の綿裏
 うやむやの世と教化も糞 雑衣
 石と一りし宿屋よ蒙古の 碑
 常や柘植の小櫛よゆけりく
 ん致の笠よ志つゝ 喜の風
 舟の鞘十寸徳よ機枋をりり
 順送の孝子は揚屋の裏階子
 憲 信といひまゝ 一のハ穴一こ
 称名の痔よま 鴨 臨る 産
 合屏よ小便 女 用 喜の客
 ちうん子よ流 眼肉と特りして

皐月律依

ちい
 人よ月やん ちい
 人もぶとれん 本がくく 一の麻
 松る系のよ付れて 津く汐の流
 石りり 清き波 乃 白 寄
 秋がくく 系と流る友の来て
 不形に 甄利 球このみ ちい
 枚並 ちんと地とま ちい ちい
 魁一ワれが ちい 佛 胆
 ちい ちい ちい 相 魚
 関体捕一 ちい 秋の ちい
 せ乃 ちい ちい ちい
 ちい ちい ちい ちい
 ちい ちい ちい ちい
 ちい ちい ちい ちい
 ちい ちい ちい ちい

山は峰ても喜い 谷よ
水は流ても喜い 谷よ
温泉へ来ん 春矣小い
布目尾より大岡乃
捨切るん 尾入く
ふ 扱くけく 尾く 尾光 尾

獨歩庵

五世

宇野氏女皇平波

わがけきかたし
之夕のうらみ
や上 保氏
古より
おのころの
おのころ
らかけ せき
奥の石 人名
は華ののり
柳ののり

皇惟 老しり 故に 名代 乃 尾
く せん 乃 乃 乃 乃 乃 乃
葉 やい つ 乃 乃 乃 乃 乃
世 お 喜 乃 乃 乃 乃 乃
不 由 上 乃 乃 乃 乃 乃
色 も け 乃 乃 乃 乃 乃
神 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
す 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
初 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
侍 の 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
美人 の 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
泳 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
入 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
社 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

こま振ぬ顔と鏡列よする
振色く容も園一まぬ
利生すもたま肥後乃古塚
桶伏あるとう白くあるうは
是く色ハ内物終因う憲
夜の生良も徳牙とありら
きく川ハ高よりそり枯の音
高屋へきめむつるのそりこ
儀書が後つる小式部うき
安ふ於子と多合を
田植の笠おきく入陸奥
堂うはよ下て舞子お流籠
菘菘や伊せも新使も月一
摘りて菅合を良のむと堂
織切織子かたる乳くくひ
済書あや芳くくも考考あひ

燕子菴

一列定跋

二世 田

朱仲

附之乃の後うき
多く強き方多
手の上お信との
秋病体
お常才と
地名
お海なる箱根山の夏
よ
佐言お桶越
お角お桶と
お名
兼禎の体八合集
お名お名お名
お外お名お名

一白立
海島へも流く佐谷のまゆ
灯ととも虫とすくふ手と
おと後くく世の付
奉はハ葉一筋の帯メく
けつくとお人の凄ひ死
苦切くお時をいやむや
辻書よ立流子男か子
月子お名お晴てハ早
奇附る石も兼禎の体
飛御りお名と後忘令操
お掛と書よお名お名
お子抱お名お名
お子お名お名お名
綴きてわ武者振もるき土大根

くろく 押鹿多く
ふ示能系多し
白鹿多し 軽き
白鹿分り

一 掬菴

三夕の月より
日おしきす
すりきり
又をりし
ふりあす
附んたる
今一 神
せき
ほむる
好る
の
く

夜更人あつまり
後てさがる
盃
遠し
吾ち
今
老
日
お
梅
あ
輪

平砂側贈答 白眼基側

雪支居一阿

身
引
檀
か
お
亦
世
年
振
反
家
牧
撰

夜更人あつまり
後てさがる
盃
遠し
吾ち
今
老
日
お
梅
あ
輪

多葉ありし

十月の桂玉ハハ時の後りなり
よみてくろい梅ノ片つらと魚も
あはれ世へ養肥の肌ハ穉キしぬ
新彼の上俵ありとありをり

○
吉柳や何よ少梅乃人さう
花んころる市るるちをりとり
源しちりさくくちりや眼ころら
茶や東いせりれとありふをり
恨柳のらんれきーさよ字の名
遠くくく夕四さーら色九月山
たこふあ枯柳の風のおより
吹たくれしてハ片年平りあち

蓬月庵

付ワタノノ方一
て強弱交り
才一日蓮家
井親 柱お
地名 人名
上方地名別
牛馬のち
武家やこころ
庵とつちり
どうくちりの
この点んゆ

國山曉

一白
華やとまろくソのハサフ
うひくも母や戸口の持た
庵とまろく医者も眉毛に皺
昔ひ猫活きく日銀取
控書法勢田ア
あちちく外がくせ
牡丹殿のもく接抄と佛の日
今更くかて障子く
ほくまき人の首露山
庵とまろく鬼も速に
くつとくの筆のあり
いぬれる鼻で斗の
陶子持身がく
附本実ヤ

古今和歌集 卷之八 秋歌

懐少の依くはる 難秋
とふも老医乃放流せし人
所類の勝茂母もよ侍ふ
禪室すれ山より伝きひ
茶とくもりちぎく上り
栗山ふ乃くく宮の宿
癖糸りくくはんせるの
医術乃くくはあくく度む
尾のともひりく減る杖の先
三年くくく実の入り漏れ様了
おハツトリの及古傑乃 兒
廓まくくおくく三浦屋の猫
翁毛乃きくけんせく秋風
吟月乃乃年ブくく細
とくくひれく肅くく類

俳藏主

附ワたり方一
地名 人名
故事
何事も附あ
りれば長まうけ

平砂側贈答

江戸座

岩松

お高 誰やうくあひらうくひのこ
流しくくいそく早く女
おまよ上く格ふるもくく夕時内
双子下風乃くくけくく参り
矢とさの格も表乃くくか
くフ坪とくく一向位く改館家
谷七々乃くく名のくく希
西りも猫もけ乃くく火乃くく賣
「さ」指の尾乃くくゆか沙乃くく
勢乃くく志乃くく入乃の松乃くく
一人乃くく旅乃くく日乃くく
略やき乃くく互乃の秋乃くく
二月乃くく乃の乃くく乃くく
矢乃くく大乃くく乃くく乃くく

石山
山崎銀谷

石山
かあてまららむごみまは清く
内りまら山竹若花咲き又
ア字つ越く迄き古伝日記
切風は流るあさうろろ輪の里
こもことおけく女房にうへ町
困りぬのぬい裏住の流うこ
あまはれおれ起くさる粥の下
伐採のたみおのころけ陸
おるまぬきて度る屋催
新築く車子一の山
おとこのむも表志あ君
こあれのぬい捨くもる楳
下おれをついこ厨子志楳
すくたのもしい指の互楳
ちりえ結のそいと桐壺
山くは犬の智あくと楳人

羅月庵

おく偏の改まら
をううらるまはし
月之夕のワたり光
一にうてまらくと
心のぬりこのやよ
さる点あり支考
うおしんん下入
法とよしく味
ふと一を好あこ
得た旅伴く
おんまらりて
うら

山崎銀谷

おく女入おく一かう世のこめ
翠つりまきよめんでけ度定
旅のころらのいどトのり
大徳の完尔といはる昔書む
えのころ齒うりりる若り
りおら新法く一機もつれあ
七洋のらうてん屋の風若
地の列り日と枕うり入る去
ひる石の狼煙をうり入る去
又於磨奴々篠うりあやう垢
うらごら一命ひらいの灸のけ
川辺紫衣よ実といまふ年
下甲ははたれりけもくあて
くく入るまらきよれ脈終

Faded vertical text, possibly bleed-through or light ink.

除衣一、くらの日のあどてり後
 大徳のさうりく、今川 智 裁
 大文火人の市ツゴ、つ家
 ワ、玉の柄と、片民も、さく、り、り
 くれ、く、門、一、貢、く、ま、き、き、
 年のまら、れ、ま、ま、の、一、甲、塚、
 女の、後、く、れ、か、い、入、
 望、金、が、市、市、利、表、あ、ま、ま、ま、ま、ま、
 西、す、く、し、の、か、の、お、ひ、の、月、の、う、け、
 不、ト、が、候、く、し、出、く、く、に、入、
 夫、坪、中、く、よ、い、よ、一、人、も、子、の、り、て、
 概、一、く、ま、あ、ぶ、く、お、話、あ、く、金、
 ぶ、夕、点、の、候、く、く、り、の、風、も、一、
 く、の、皆、を、入、教、く、く、一、
 ろ、く、し、け、り、む、む、出、掛、く、り、
 新、造、し、九、年、一、面、壁、あ、ひ、神

玉簪笄

北冥舎 内 魚堂

付、く、く、手、く、
 表、色
 権、由、一、酒、の、味、
 ろ、あ、る、
 友、信、世、名
 ろ、あ、の、実、
 尾、う、ち、祭
 夕、か、が、
 余、い、下、の、句、と
 ぐ、合、へ、

一目の、ま、く、く、の、故、を、く、く、み、遠、く、
 唐、指、く、ま、な、話、は、と、撮、く、上、ヶ、
 夕、ま、あ、り、小、磯、あ、ひ、の、裸、背、馬、
 金、く、ま、を、め、け、い、せ、い、の、意、は、
 井、戸、深、の、深、く、は、く、く、と、様、な、を、
 披、く、掛、の、故、を、
 長、ね、病、痴、入、前、の、さ、く、く、
 華、と、湯、柳、の、旅、の、か、く、く、
 孝、行、く、似、合、ぬ、眉、も、ま、ま、く、
 有、人、の、眼、り、昔、茶、の、
 ろ、あ、の、と、く、く、く、く、く、く、
 長、真、山、く、鳴、呼、と、唐、
 へ、く、く、く、く、く、く、
 佛、く、物、く、美、女、の、淋、く、く、

年、明の君と舊存、送る、秋
 四季、お言解や豆、腐やの、白
 赤廊、涼、く九、耀、七、耀
 実都、多の下人、賑ひ、く
 多傳、の卵の花、お、く、紅、系、く
 末、鮎も、漁、布、揚、さ、く、く、川
 蟬、と、時、あ、く、揚、お、く、の、瀾
 目、透、歩、免、く、き、せい、大、と、こ
 松、扇、と、わ、く、く、の、斗、白、牡丹
 湖、く、斗、入、歯、の、能、役、者
 年、く、の、牡丹、く、く、の、宮、司
 菊、器、扱、ひ、く、面、糸、の、細
 團、お、く、と、字、且、く、く、喉
 野、分、く、く、独、く、く、孫、の、女、郎、系
 琴、座、く、の、は、除、衣、の、孔明
 大、門、通、く、馬、具、は、鮎、留

青畑居

荒木龜貝

北名、お、く、く、く、
 奥、丹、の、北、名
 赤、款、七、二、候
 人、名、杜、好
 寄、馬、系、体
 山、於、く、於
 托、懸、古、多、丸
 中、上、刀、劔
 後、く、平、家、お、く、
 優、く、く、く、く、
 秋、の、虫、の、お、く、く、虫
 の、く、糸、四、季、の、く、
 竹、た、く、く、く、く、

お、く、鋪、と、焼、く、都、の、お、く、く、
 陽、お、く、く、お、く、く、く、く、く、
 都、お、く、く、く、く、く、く、く、
 去、く、く、く、く、く、く、く、
 前、お、く、く、く、く、く、く、く、
 新、お、く、く、く、く、く、く、く、
 苗、お、く、く、く、く、く、く、く、
 鉛、お、く、く、く、く、く、く、く、
 中、軍、の、帳、お、く、く、く、く、
 玉、島、川、お、く、く、く、く、
 蚊、計、お、く、く、く、く、

竹
 竹
 竹

くづくある白小
さるまゝ形了ら
くハ勿らんて

庭甄齋

庭甄交りこり乃
ワくく心月べー
少辨のまゝと嫌
才一 一系
突を古丸の平は
手と 物
人名 女
良 宗
四季 宗
比 茶中
聖 子
一向 戸
平明地 妻
史 記
又 出

一白
まや中一少情ながり
我々齒と九かん降
紫一々々々々々
は子あ人の
松江の鐘はさ
死んが合倉ふ大
かききこの子
蒜とこのは
市一
あ雨
警サ切又
善心
そく
増々
この
啼む

高橋麻中

ち
之谷
はあ
是サ
あづ
女玉
兼人
推と
壁不
道れ
を魚
昔く
人子
免ハ

新

うら... 三季五
のう
ふか...
竹...
あ...
お...
と...

楊月庵

法弱...
み...
古...
お...
ま...
柱...
葉...
他...
た...

たれくも...
神
百...
十...
一...
常...
あ...
刻...
縞...
病...
い...
琴...

丘 宗梅

ち...
小...
何...
た...
葉...
珠...
志...
山...

少...

あまのこゝろ
あまのこゝろ
あまのこゝろ
あまのこゝろ
あまのこゝろ
あまのこゝろ
あまのこゝろ
あまのこゝろ
あまのこゝろ
あまのこゝろ

変明庵

弁叙 系地名
系地名
軍作 旗作
互作 心常
うく物 食教
牛馬のう
附作の台一ん

重踏の喜れさむさうく風
夜とばより名ゆりふはのやう後
時うぬぬの替下れう布子
刈萱もこれがたやう答やう
とりふいふ小妻家の底ぬちて
口入や後合のむむ耕女非
つひられし泣葉乃に戸七履
びりううりとまは湯うらま松葉
足ぬぬのこれとまもや化糖葉
うららりと秋はまらり矢の振石
津うり流るる秋ア乃の葉の喜
あ妃うまが介万騎うごうん
うう約束う一人ううらん
椽うばうう帰うう突うう
納豆汁うう寛うううう
伝老乃痛む鬼もうはうん

井 泥牛

炭うー挽くさうくくううう
ゆ亮と焚くうう河内のうう
短ふ入啼くむうう知もまやま
守武ハいとうう時由入る馬帽子
休陀とわれを能のうう葉の小編互
後前並程うう天板のううう
足帝かー一徳屋彩代と麻子うり
子の目せー納えくくのまや毛う
掲うれう礼中りううう角力
赤風呂もぬら泥草中め百旅葉
袂うう葉とふううううう
ワが書と抱入糸袋のううう
毛火きやれバヤと入船
死んふ令喚うう大え入馬

明和の世
中興の世
くさくさ
正和の世
正和の世
正和の世
正和の世

何のくさくさ
猫藪あつた
小判がくさくさ
智恵の涯
辛うす
喰うと
吟
くさくさ
延喜の代
加茂川
月山の楳
井
小さく
爛ほ
あつた

五席庵

江戸座栖隠

橋本泰里

才一附
よふ
今の信
句

同壺の
榻
七
壳
合
大井
柳
橋
手
侍
の
画
母

魂 柳の居るも半ハ字の中
城とこハがる古伝の 祇中
志のぬ 翁の沖渡りて 逢ふ
兵糧仕出に石山の 庫 裏
侍女 翁と 祈るふ 名 寺
村の 織女は 西ふ 牛 飼
板の 牛 けり 風の 今 切
拾ふ 沖の ガゴ豆人
阿の 白服の 袖は 本後の 女
徳居の 車 童と ちり ちり
ちり ちり 妙き 笠 翁の 作
大君 あそびさう 流 漿 穿る けり
以能の 望の 志は 舞ふ 厭
信 於 あつこと 芋の ちり 秋
嚴 視て 振の 去る め
院号 付キ 蓮 妻との

晦朔庵

江戸廿あり
江戸地名
善寺の 香 松魚
善寺
廓中 万のり
佛 諸 通 云ト 奉
ミト 奉
面白キ 是
江戸ト 云 勺

江戸産贈答 石橋一磨

西のり と 猫と 斤 荷の 火 鉢
孫の 着と 赤 見よ 吹 清 灰 梅の 糸
草 白やよ ぬ 通の 水や 初 松 色
江戸の 地は 万のり 奉 名 之 紫 神
大門へ 名 見の つれ の 吹こ ます
放れる 思ひ ぬ ね 子ヲ 抱
小 園ハ 秋も 壳の ちり ちり
塗 ちり ちりの 程 空の 鳥 帽子 襟 糸
ち 涼し 橋の 産 糸の ちり ちり
麦の中 白 芥子 ちり ちり ちり
一ふり ちり ちり 代の ちり ちり ちり
うちり ちり 見よ ちり ちり ちり
産 ちり ちり ちり ちり ちり
指 打ち 妹の ちり ちり ちり

世の留や言傳いひつたの言ことばぬ
 松坂まつざかより言ことばつてはない多おほ 松まつ
 井いよよままままままくくはは連れん繩じゆのの巻ま
 うう切きくく切きくく袂たもとのの巻ま
 いらいらくくくくとと切きりり一いっ條じょう君きみ
 けけ襦じゆ袢たんのの取とりり多おほなりなり
 加か茂ものの世よ後ごのの麻あよよ多おほ眉まゆ
 楊やうととちちのの木き名なのの月つき五ご
 乳にののけけらら女に房ぼう呵かつつててとと注しゆ
 階か杖じやうわわくくささ下したケけ帯おびのの尾お
 佃いんのの髯ひげ帆ふ袂たもとのの一いっ糸し
 器き原はらのの初はつ化け表へせせるるぬぬんん
 井い井い尚しやうのの衣えのの明あケけルる 元もと日ひ
 二に布ふのの巻まりり夕ゆふ息いきへへ飛とぶぶ
 鶴つる鈴すずのの尾お上かみ降くだのの音ねキき時とき
 世よよよあるある近ちかハハ尾お燈とう鳴なくくはは史し

